



極樂とんぼ

里見 弴



中央公論社

極樂とんぼ

©一九六一

昭和三十六年四月三十日初版印刷
昭和三十六年五月八日初版發行
著者 里見淳 發行者 栗本和夫
發行所 中央公論社 東京都中央
區京橋二ノ一 振替東京三十四番
印刷 三晃印刷 製本 小泉製本

定價 三百一十圓

極樂とんぼ

當主・吉井市藏は、天保十三年（一八四二）に、薩摩藩、川内なる出城の城主・北郷氏に仕へる輕輩で、暇あれば畑仕事で衣食の不足を補はなければならないほど貧しかった源十郎の嫡男として生れ、幼名は嘉介。やゝ長じて、郷黨の大先輩・大久保利通を崇拜するのあまり、彼が前名を勝手にとつて、市藏と改めたもの。晩年、書道に没頭するに及んで、蒿堂と號した。十七歳、北郷氏の「お家騒動」Ⅱ閨門の紛争に連座して遠島中の父の死を聞くや、祖父と母とを残して江戸に奔り、爾後、明治八年、官途に就くまでは、夙夜匪懈、苦學の生活が続いた。

夫人は、安政元年（一八五四）生れで、南部藩の留守居役として、江戸詰めの期間は、他藩の相役との交際もあり、寛濶の性として、可なり華美に生活してゐた手島判左衛門政邦

の息女・たみ。生後數ヶ月にして父に死別、十四歳で「御殿奉公」にあがつて間もなく、維新の戦亂に朝敵の穢名の下、暗夜、奥方を守護する僅か七人の供廻りに加はつて、薙刀小脇に、官軍の包圍を潛り、漸く城を落ち延びた。後、若くして寡婦となつた母に伴はれて上京したが、赤貧洗ふが如く、當時の力業を物語る骨太な掌は、生涯彼の女の誇りとするところだつた。

明治十年、かういふ二人が縁あつて東京で結ばれた。媒酌人の、新渡戸稻造の伯父に丁る太田時敏といふ者は、「高砂」の一曲の代りに、白刃を掉つて、劍舞を引出物としたとか。雙方ともに再婚ながら、琴瑟相和して、謙一、道子、徳二、周三郎、芳子、公四郎、省五と、たゞ一人の夭折者もなく、七人の子女を育てあげた。

矢繼早に三兒を得た後、市藏は、遣歐使節・何某に隨伴中、憲法調査を命ぜられて一行と別れ、英、佛に留まること四年にして歸朝したので、上の三人と、三男以下の四人との間には、それだけの年齢の懸隔が生じた。僅か五つ六つにしても、幼い身として、上からはともかく、下から見あげる目には、ちよつと手がかりのないほどの可怕い存在だつた。お世辭ツ氣を抜きにしても、よく他人から、「稀にみる、仲睦まじい御同胞」と褒められたものだが、細かな觀察眼には、父親の外遊を境として、謂はゞ前派と後派とでもいつた

風な、おのづから兩分された親疎の差は映つた筈だ。

本篇は、明治十八、乙酉の年（一八八五）六月十日に生を享けた三男・周三郎を主人公とする稗史である。

一

よしんば總領だらうと、嘗ての一期間には末子たるの寵を擅にしたわけだが、あとからあとからと殖えて來るにつれて、兩親の子女に對する關心は次第に薄らぎ、結局、年更としなて儲けた末子ぼっしが一番可愛い、といふのが、ほど世間一般とも言へる共通性だらう。ところが、「後派」の總領あたに丁る周三郎は、幼時、「小兒喘息」といふ専門語はまだなかつた頃にしても、それが持病で、ほかの同胞きやうだいに比べると、段違ひに羸弱ひよわかつたため、弟妹たちの出生後も、なんとなく、末子じみた偏愛を受け續けた傾きが見られる。ちよつとしたことにも、すぐ醫者よ藥よの騒ぎで、大事に扱はれれば自然と甘ツたれたくなり、制められようと叱られようと、思ひのまゝを通さうとしても、體質的に亂暴は働けず、さも悲しげにビ

「ピーと泣きだす。執拗く泣いてゐるうちには、宥めすかしの優しい言葉や欲する何物かが得られる。もちろん意識的な企圖ではないにしても、さういふことの繰り返して習慣づけられ、やがては後天性ともなりがちなもの。少くとも、本篇の主人公にあつては、それが、甘ったれの泣き蟲で、我儘で、女々しくて、多少の狡猾さをも含む性分に形づくられて行つた大半の原因と言へる。

その一方、六・七歳の頃からは、「後派」の年頭として、弟妹たちの牛耳をとる、餓鬼大將的根性も萌して來た。芳子、公四郎、時にはまだよろ／＼歩きの省五まで率きつれて、近所の弄具屋に押しかけ、「自分は店番の婆に何やかと話しかけてゐるから、その間にお前たちは、なるべく見つからないやうに、なんでも欲しいものを取つて、さつさと先に歸れ」と、豫て言ひ含めて置いた手筈どほりを実行せたりした。所有に關する自他の辨別などつかぬ、原始的共產主義者なる幼き者どもに、まして、盗みだの、惡事だのといふ觀念のあらう筈なく、たゞいくぶん内證事らしい匂ひに、ちよつとした亢奮を覺えるだけだつた。二度、三度と重なるうち、それと心づいた弄具屋の婆さんも、明治の長閑けさで、その場は素知らぬ態にすませ、「奥様ぢき／＼では畏多いから、女中頭の方にお目にかゝつて、實はこれ／＼と話し、きちんとお鳥目は頂戴して來た」と、のち、人に語つたとか。

かういふ、誰に教はつたでもない「智慧」に對して、嚴しい叱言を食つたそも／＼の初まりがこの時だつたが、「お巡査まはりさんにつれて行かれる」といふ言葉に怖毛おぞけをふるつただけで、メソ／＼泣いてゐるうちわりに早く放免となり、惡かつたの、二度と再びあんなまねはしまいのといふ自責の念など、爪の垢ほども浮かびはしなかつた。以後、往來に出ると、必ず書生か女中かがついて來るので、頻りにそれをうるさがつただけのこと。

性に關する「智慧」も、ほど同じ頃から目覺めだした。弟妹たちはそつちのけに、依然として末子の特權を主張し、夜は母に添ひ寢して貰ふ習慣だつたが、萎しなびた乳首をしやぶつたりいぢくつたりしながら、足の爪先で、わざと荒ッぽく裾を搔き分け、股の間に滑り込ませる、そのつるりとした快感が盲目めくらの手引き役となつた。はつきり理由を考へようとはしなかつたけれど、このことに限り、すぐ下の芳子には内證ないしよにして、四男坊を捉つかまへて、「お前、今夜やつてみろよ」と勸め、自分は子供部屋に寢て、翌朝、にや／＼しながら、「おい、どうだつた？」「腿ッ玉、抓られちやつた」「馬鹿だなア。お前、やり方が、へたなんだ」そんな調子だつた。また、いっどこで憶えて來たのか、「關東のつれしよんべん」といふ號令をかけて、庭の隅で一列横隊に竝ばせ、自分が先立ちで前をまくると、ひらりと體たいを躲かして正面に廻り、しやがみ込んでゐる妹の股間を窺き込む、そんな「智慧」もお

のづと浮かんだ。なか／＼十人が十人かういくものではない、といふ意味に於て、一種の天才兒、と呼べないことはなからう。

習はずしておのづから覺る天才兒のことだから、學齡に達して、學習院の初等科に入學してから、日々の通學を喜ばう筈はなく、まして、「影辨慶」とか、「そと蛤のうち蜆貝」とかはれる氣の弱さから、いつまでも先生や同級生とも馴染まなかつた。一番楽しいのが土曜の午後で、日曜ともなれば、「あゝあ、また明日ッから學校か」と老人じみた溜息が洩れるくらゐ、いやで／＼たまらない。殊に、十四・五歳までなほらなかつた癖で、寢たまゝ小便をして丁つた朝などは、無理に咳をせいたり、頭痛がすると言つたりして、「假病をつかふ」といふ手をおぼえ込み、次第に嘘の興味が募つて行つた。さういふ場合、成人には、わかつてゐながら知らん顔ですます放擲もまゝあるけれど、弟妹たちは、子供に獨特な、へんに鋭い洞察力で真相を見抜き、遠慮なく輕侮や揶揄の眼差を射つてたり、「ずーるいな、ずーるいな、周兄ちゃんのだる休み」などと嘲したてたりした。この、謂はゞ味方から擧がる非難の火の手には、どうにも齒が立たず、幼時に何より禁物の後目たさ、卑屈さ、それをごまかさんがための負惜みなど、ひと口に言つて、天真爛漫とは正反對の、餘計なものばかりが身に滲みつきだした。

かう言ふと、いかにも憎ッたらしい施毛曲りのやうにも聞えようけれど、根は至つてお人善で、どこか剽輕なところもあり、壓のはいる丸顔も可愛らしいので、決して一家中のけ者、嫌はれ者にされてゐたわけではない。それどころか、内輪の寄合ひで、餘興といふやうなことにでもなれば、いつも奇想天外なおどけぶりで、一座の腹の皮を繰らせる人氣者だつた。中世紀の歐洲宮廷につきものの道化師にも似た立場ながら、こゝにも一種の天才的ひらめきを見せるので、すこしも嫌味ではなかつた。

やがて芳子や公四郎も初等科に通ひだす頃には、以前のやうな、無我夢中の盲従から、：：むろん理窟ではなく、好惡の感情だけにせよ、「後派の總領」に對する批判の眼があいて來て、時をりの噂み合ひは避けられなくなつた。口でならともかく、掴み合ひともなれば、瘦ッぽつちの周三郎は、どうかすると、五つ違ひの末弟にさへ泣かされるくらゐで、お轉婆な芳子にはとても太刀打ちならず、やす／＼と餓鬼大將の位置を乗つ取られることもあつた。

初等科も卒業にちかく、自分でちんぽをいぢくつたり、仔犬どものよくやるじやれ合ひさながら、弟妹たちと上になり下になるの取ッ組み合ひの最中、それとなく相手の腿にこすりつけたりすることによつて、言ふに言はれぬ快感を覺えだした。それが昂じて手淫の

習慣。これにかぎり、芳子は誘はず、母家とは植込みを隔てた土蔵の、浅い庇の下なる石段に、第二人を左右に腰かけさせて、全身に粲々たる春光を浴びながら、「いゝかい、俺のやるとほり眞似するんだよ」大體、從順な性の弟たちが、「痛いからいやだア」とばかり、バタ／＼逃げて行く背なかへ、「ぢやア、芳ちゃんをつれて来いよ！」

恰度その頃のこと、結果的にみれば、われらの主人公の一生を方向づけたほど強い影響力をもつ、三つ四つ年長の、あつぱれなる指南番が現はれた。その、出入り魚屋の小忤なる勘吉は、否應なしの筋肉労働で、がつしりした體軀は備へてゐたけれど、兄なる者の手代りとして、鮮魚を入れた盤臺を擔はされると、掛け繩を、天秤棒の兩端へグルグルと二・三重に捲きつけないと地面を摺るほどの背恰好で、まだ子供ばなれもしてゐないくせに、新宿の女郎を買つたといふのが大自慢で、事細かに閨中の模様を話して聞かせたりした。當時の腹掛の右の腋の下あたり、表と裏との絛目には、成人ならば時計を入れて鍔でも垂らさうといふ小さな衣囊がついてゐたものだが、或る日、「坊ッちゃん、素的なもの見せてあげようか」と、にやり／＼笑ひながら、縋ふやうに重ねた二本の指先をそこへ突ッ込み、そろツと引き出した紙片の折り目を起こすと、まづ自分ひとりでゆつくり眺めてから、「俺がこれを見せたつてこと、だアれにも喋るんぢやアねえぜ」と諄く念を

押して置いて、掌の平に展べ、ついと鼻先へ突きつけてよこした。紅、緑、紫、いづれもあくどい安顔料で刷つた今出来の春畫だつた。およそ空想してゐたとほりとは言へ、繪のまづいせぬもあつてか、着衣のまゝの肢體がどこでどうこんぐらかつてゐるのか、すぐには呑み込めないながらも、身内が震へるほどの亢奮を覺えた。「坊ッちゃん、あんたも早く誰かに筆おろしをして貰ひなよ。いくて／＼、とッてもこてえられたもんぢやアねえぜ」もとより初めて耳にしたのだけれど、「筆おろし」といふ言葉の意味するところもすぐに呑み込めたし、自分の胸のうちをそつくりそのまゝ代辯されたやうでもあつて、目がくらみさうな刺激を受けた。その後も何枚かこの種の本版畫を見せられたが、男のものも女のものも、馬鹿げた大きなのが腑に落ちず、おづ／＼と訊いてみたところ、「それアまア、繪空事つてな、ちつたア大袈裟にけえてあるんだよ」

これに續く數年間に、むろん誰にも内證で、場末の席亭でやつてゐた男女合同の源氏節芝居といふのや、淺草の玉乗り、さすがに女を買はせようとはしなかつたけれど、「序だから」と六區の岡場所まで引つぱり廻したのもこの勘吉だし、有形無形の薰陶、感化は竝ひと通りのものでなかつた。もと／＼肥えた土が、働き者の百姓の手にかゝつたやうなもので、稔りの秋が待たれる、といった態。

勘吉を「學科」の教師とすれば、續いて「實科」の指南番が現はれて、十五歳の彼に、「筆おろし」の役を勤めてくれたのが、女中頭の加代といふ者だつた。年齢は母とさして違はず、身の丈四尺八寸ばかり、お出額の奥目で、大きな口から門齒が二枚はみ出してゐると來ては、人間よりも猿に近い醜婦だつたが、或る朝、洗面所にはいつて來て、「周ぼツちやま！ 氣をつけなくちやア駄目ですよ。今朝は珍しくあたしがお床あげに行つたからいゝやうなもの、こんなもの置き忘れて、誰かに拾はれたらどうなさるんです」と、皺くちやな櫻紙を、八ッ口からちらりと窺かせ、笑ひもしうに行つて了つた。その後、今度は書卓デスッに向つての現場を抑へられた。「そんなにしたいんなら、こつちイいらつしやい！」と、洋館の階段の裏側ゆゑ三角形の戸棚に押し込まれた。……度肝を抜かれた態もあり、人目を憚る早業はやわざとて、あんまり「いく」もなく、むしろ、屈辱の苦味にがみが残つて、「またとは御免だ」と思つたが、三度目の時は、寢床のなかとて、こそくと、耳もとで囁く聲が、「主に夏のことだが、夜半に旦那様が、かういふ具合に手燭を持つて」と、袖に圍ふやうな形をしてみせて、「あたしたちの寢相ねさうを見にいらつしやる。あゝ見えても、えらい助平な方。一度あたし、わざとおッびろげて見せてやつたら、たまらなくなつて乗ツかゝつていらしたけど、すむまでちツと眠たふりしてゐてあげた。だからきつと旦那

様は、あたしは知らないんだとばかり思つておいでに違ひない」平氣でこんな話もして聞かせた。こゝまで露惡的にやられては、屈辱感など雲散霧飛だ。父に對する嫌惡や輕蔑の念も、やがて、同類同士だけにしか抱けない親和の氣持と融けて行つた。：：長足の進歩と言ふべきだらう。

一一

秀才だつた父・市藏が、十四歳で「勘定方見習」といふ役名で出仕した時の、直接の上役で、何かと目をかけ、引き立てゝくれた大恩人・遠武某の後裔が、維新後微祿してゐたのを、歸郷の都度、展墓はもとより、當時博多に移り住んでゐた遺族に對する金品の補助も怠らなかつたところ、今度、恩人からは孫に丁る娘の縁談が調つたので、擧式の日まで、行儀見習やら衣裳の支度やらにひと月あまり、吉井家で預り置くことに話がきまつた。折から、周三郎が中等科三年に進まうといふ早春のことだ。

この、濱と呼ばれる十九歳の娘は、いかさま南方民族の血を混へたと思ほしいいかつい

目鼻だちで、體つきも成熟しきつてゐた。明治末葉の嗜好による美人ではなかつたにしろ、よくハワイの娘などに見かける、逞しい、野生的な魅力はまた格別だつた。喘息病みの、寢小便垂れの、ひよ／＼してゐたわれらの主人公も、今や青春の活氣に満ちて、：：これはまた濱とは正反對の都會的優雅さ、枕繪の若衆めくまで、細面の頬紅く、つんと鼻筋の通つた美少年に成育してゐた。かういふ一對では、男女、その所を替へたかの觀もないではなかつたが、電、磁氣のやうに、十と一とが強い牽引力を發揮するのに順も逆もあるまい。偶然と欲求とがほど相半する一夜の轉び寢から、みる／＼新鮮、潑刺たる官能が燃え盛つたのも當然の歸趨と言へよう。最初から、雙方で、「こいつアもうだいたい修行が積んでる」と、すぐさう勘づいたほどの彼等とて、みる／＼目の色は青ずみ、頬がこけるまでの淫樂に耽つた。阿漕ヶ浦に引く綱も、度重なれば何とやら：：。

學期試験で周三郎の落第が發表され、がつかりしてゐた母親の耳に、糅てゝ加へて、「昨夜、實はこれ／＼しか／＼」との密告は、言はずと知れた、加代の嫉妬に根ざすところ。：：父の憤怒、母の狼狽、悲嘆など、わかりきつた場面は省くとして、取り急ぎ結末だけを述べれば、指折り敷へて式の當日を待ちわびてゐた濱の女親を、至急博多から呼び寄せた市藏は、日比の傲岸に似もやらず、恰もわが犯せし罪の如くに詫び入つて、もちろ